

論文の内容の要旨

論文題名

Clinical outcomes of left atrial circumferential ablation and box ablation for paroxysmal atrial fibrillation

(発作性心房細動に対する拡大肺静脈隔離および BOX 隔離の臨床転帰)

掲載雑誌名

THE SHOWA UNIVERSITY JOURNAL OF MEDICAL SCIENCES Vol134 No. 3 2022
年 掲載予定

内科系内科学（循環器内科分野）専攻（横浜市北部病院） 小野 盛夫

内容要旨

【背景・目的】 拡大肺静脈隔離術アブレーション (LACa) と LACa に後壁隔離アブレーションを追加する (BOXa) は心房細動 (AF) の一般的な治療法である。しかし、発作性心房細動 (PAF) に対する両者の比較試験は少なく、これらの臨床転帰を比較することを目的とした。

【方法】 アブレーション予定の PAF の患者を LACa 群または BOXa 群にランダムに割り当て、6 か月間フォローアップした。主要評価項目は 6 か月時点での AF 再発率と左心房駆出率 (LAEF), 及び LAEF の変化とした。LAEF は核磁気共鳴画像法 (MRI) によって測定し、副次的評価項目は、24 時間心電図での上室性期外収縮 (SPB) の頻度と上室性頻拍期外収縮 short run (SVR) とした。40 人の患者 (LACa : 21、BOXa : 19) が無作為化され、LACa 群の 1 人の患者と BOXa 群の 3 人の患者はフォローアップ中に除外された。

【結果】 患者背景と 6 か月での AF 再発率、および 3 ヶ月と 6 ヶ月の LAEF 及びその変化に関して両グループに有意差はなかった。ただし、6 か月での SPB の頻度と SVR は BOXa グループの方が LACa グループよりも有意に多かった。

【考察】 AF 再発率と LAEF は両群間で同等であったが、BOXa 群では 6 か月で SPB と SVR の発生率が高く、BOXa が PAF 患者の治療に利点を示さなかった。